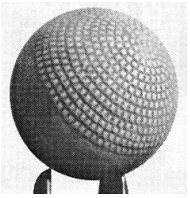
【序章】　試合開始前　　◆戦前の長崎県軟式野球界◆

大正８年に少年軟式大会が始まる

日本で初めて野球が行われたのは明治６(1873)年に東京大学前身の開成学園アメリカ人教師の紹介によるといわれている。

軟式野球は日本で生まれたものだが現在のボールの元となっているゴム質のボールが開発され、それを使用して大正８年７月に京都市立第二高等小学校校庭で行われた少年の大会が最初の軟式野球大会であった。



翌９年に大日本少年野球協会が誕生し７月に初の全国少年野球大会が兵庫県鳴尾運動場で開催。長崎県が初参加したのは大阪天王寺公園で開催された第２回大会で上長崎小がＢ組（小学校学童の部)に出場。優勝した岡山出石小に初戦で0-2敗戦。

長崎県下でも少年野球が盛んになり、大正12(1923)年から長崎市小学校体育研究団により市内小学生大会が開催され、尋常小学校(当時は６年生まで)が山里小や磨屋(とぎや)小など15校。高等小学校(２年制)は７校が参加。

山里小は大正14年と15年に連続して全国少年野球大会に西九州代表として出場している。だがその後は諸事情で山里小は県大会に参加できず、昭和２(1927)年は長与小が代表になり、西浦上小、村松小や、高等科では蚊焼小など西彼勢の台頭が目立った。

全国大会での県勢の戦績は二回戦止まりがやっと…であったが、昭和６(1931)年開催の全九州・山口学童大会で優勝したのが西坂小。後に海星中学から社会人の門司鉄道管理局を経てプロ野球の阪急軍(現オリックス)に昭和14(1939)年入団した荒木政公投手を擁しての優勝だった。阪急での荒木は１年目に17試合登板で９勝２敗。シーズン中に徴兵検査を受けて合格すると終了後に応召し後年に満州(中国東北部)とソ連の国境で戦病死している。

少年野球が盛んになり父兄の関心が高まってくると各学校に後援会ができてきた。これは主として少年野球を経済的に援助する目的であったが時として試合運営や、練習方法までに口を出すようになり各地で好ましくない事態が起きるようになってきた。

そこで昭和７年３月に文部省訓令で野球統制令なるものが発令され、少年野球の全国大会開催ができなくなり長崎県下の大会にも参加校が激減するようになった。

戦前の長崎県軟式野球界、あれこれ…

代わって活発になってきたのは一般の軟式野球。早いところでは大正10年ごろから広がりをみせたといわれるが長崎市の場合は、大正３年に浦上天主堂の完成記念として開かれた浦上地区町対抗野球や、三菱の工場対抗などは硬式で行っており、軟式が普及したのは昭和に入ってからとなる。

新聞紙上に初めて登場した大会は、昭和６年の長崎新聞社主催による全長崎軟式野球大会。これに参加資格があるのは会社や工場のチームでクラブチームの出場は認められていない。県庁や市役所に三菱関係の工場、銀行などが参加している。全国大会予選が始まったのは翌７年からだが活発化したのは10年に入ってからといえる。

昭和10年に長崎市内の17チームが軟式野球第一連盟を結成しリーグ戦を開始。翌年には同連盟が主催して第１回県実業野球大会も開催している。県大会といっても当初は長崎市内のチームがほとんどで佐世保から国鉄早岐機関区の参加があったぐらい。その佐世保には当時では同機関区のほか海軍工廠や玉屋、郵便局など10チーム前後があり日本野球協会佐世保支部予選を開催している。

長崎民友新聞が長崎市内商店早朝野球を始めたのもこの10年で、のちに長崎日日新聞も別途に早朝野球を開催。県軟式野球連盟初代理事長の渡辺源(S.61年没)も浜屋のエースとしてこのリーグ戦や早朝野球で活躍していた。

戦前の県一般軟式野球界で中央の舞台を踏んだのは、全日本選手権大会に出た長崎市役所と、昭和14年開催の第１回明治神宮奉賛全国大会の佐世保造兵部。この大会は全国16チームの北九州代表として出場し、初戦を北関東代表の銀翼クラブに２－０。二回戦で優勝した神戸合同運送(阪神)に１－２で惜敗している。

この大会も次の年の15年２回大会をもって終了。戦争の激化で野球どころではなくなった。

県内でも野球大会が開かれたのは昭和17年まで。戦前から「陸上や水泳は全精力、全精神を注いで最後までやらんといかん。この点は日本の武士道精神に通ずるものがあるが、野球はあるところまで飛べばホームラン。日本の武士柱精神に反する」と、ある学校長が語ったなどの競技。戦争突入ともなれば〝敵性スポーツ〟として、思われていたのかも知れない。

全日本軟式野球連盟公認球の変遷

S13年～S24年
割れにくい二重貼りの
菊型健康ボール

S25年～S34年
ディンプル型で
縫い目が形成

S35年～S43年
ディンプル以外の
余白に☆形を入れ
滑りにくく安定性が増した

S44年～S59年
従来のA号より外径が
2mm大きくなった
L号が登場
一般用に使用

S60年～H17年
空気抵抗を抑え
飛距離を伸ばすために
ディンプルの形を
円から楕円に変更

H17年～H29年
縫い目に傾斜を付け
左右対称に
ディンプルも小円で
三角形を形成

バウンドの高さを
抑制した新世代ボール

H30年～　M号球
旧A号より約2g重く
縫い目の数も4個
増えて92個に
空気抵抗を減少

原爆のガレキの中から探し出す白球

県都長崎市に原子爆弾が投下されたのは昭和20(1945)年８月９日。そして六日後に終戦となった。国土は戦災で荒れ、長崎市は原爆のガレキの中、苦難な生活の毎日だった。終戦翌年４月に新しい県体育会(現協会)が結成され軟式野球部も設立。戦後初の軟式野球公式戦は７月14日から県体育会主催で開かれた。長崎市の浦上一帯は原爆のため一面まだ焼け野原で、ボールが飛ばない時代とはいえ伊良林小学校の校庭などが会場であった。

第１回京都国体に参加すべく、バスケット、バレー、軟式庭球、卓球、陸上、体操と、軟式野球の７競技県予選も９月に開催されたが軟式野球での九州２枠の壁は厚かった。

昭和21年８月26日に全日本軟式野球連盟が結成されて軟式野球の全国組織が統一されると、１年後の22年１月に県軟式野球協会(現連盟)を結成し３月に県大会を主催。県大会といっても佐世保からの山領組と全五島を除くと参加38チームの殆んどが地元の長崎勢だったのも、当時の組織状況からみてもやむを得ないところであった。

山領組が全日本選手権大会を制覇

この大会で優勝したのは谷畑。国民体育大会から分離した第２回全日本軟式野球選手権大会(現天皇賜杯大会)の県予選を兼ねた県内５市対抗でも優勝候補であった。ところが決勝で対したのが24歳で一番脂の乗り切っている藤茂男投手を要する山領組。外角いっぱいの速球が打てずに０－２で封じられた。

全国大会の山領組は藤と、谷畑から補強したクセ球の大橋衛の２本柱で勝ち進んだ。東京代表で優勝候補の菊水クラブは延長14回。京都戦も延長。この５試合で相手に許した得点はわずか２点。２投手の併用で乗り切った。

【一】	9-0	鶴岡クラブ(山形)
【二】	3-1	昭和電工(富山)
【三】	2-1	菊水クラブ(東京)
【準々】	1-0	ピノチオ(京都)
【準】	1-0	西部ガス(福岡)
【決】	6-0	谷村クラブ(山梨)

決勝の谷村ＬＣクラブ戦は相手投手の立ち上がりを攻め三回を終って４－０。五回に２点を加え６－０と、大橋が六回まで投げると藤が締めくくる完封リレーで優勝に花をそえた。決勝までの６試合を通じて両投手の被安打は22。与四球16、奪三振32、失点２の投球内容だった。

山領組のオーダー
③田　中
⑦飯　田
⑤力安兄
②富村弟
①　藤
又は大橋
⑥滝　峠
⑧鷲　崎
⑨江里口
④我孫子

この快挙は佐世保スポーツ界で初めての全国制覇であってナインを迎える佐世保駅頭は土建業界をはじめ各界からの花輪や出迎えの市民で埋まりナインは駅前から市役所までの目抜き通りをパレードして新たな感激と興奮に包まれたが、チームの解散で山領組の天下もこの年だけに終った。

大優勝旗、海峡を渡る
山領チーム歸る
佐世保は感激のルツボ

当時の長崎民友新聞の記事

大橋球場が完成したのは昭和26年

原爆が投下されてから６年目。浦上周辺も復興が進んだ昭和26年５月に、長崎市営野球場(通称・大橋球場)が完成した。野球関係者が待ちに待った両翼90m、中堅115mは当時としては画期的な野球場である。

その竣工を機に長崎日日新聞社(現長崎新聞社)と長崎県軟式野球連盟の共催で県下郡市対抗軟式野球大会が始まり、五島や壱岐・対馬の離島３チームを含めた県下10郡市代表チームが集って県軟式野球の覇権を争う記念すべき大会が始まった。

昭和26年9月30日付けの長崎日日新聞紙面より

この大会も10郡市代表で始まったが比較的本土に近い五島や壱岐は良かったが、対馬からの不参加が目立ったのは、国境離島がゆえの要因である。

華やかだった炭鉱野球

昭和26年に始まった県下郡市対抗で第１回と第２回大会を連覇したのが日鉄御橋炭鉱(北松＝吉井)。第３回大会から始まった(15回まで)準硬式使用の大会でも第３回で準優勝の住友潜龍炭鉱(北松＝江迎)が第４回と第５回大会を連覇。第７回大会は紋珠岳炭鉱(佐世保)が初出場初優勝。翌年の準優勝は端島炭鉱(西彼)といった具合に炭鉱チームの活躍が際立っていた。

天皇賜杯全日本大会でも、27年に大分県で開催の第７回大会で日鉄御橋炭鉱が４連勝し準決勝で０－１惜敗。翌年の第８回大会は住友潜龍炭鉱、続いて日鉄北松炭鉱(北松＝鹿町)が出場。昭和27年から33年までの７年間で３つの炭鉱が６度の出場を果たしていた。

だが、日本の近代化を支えていた石炭需要も陰りを見せ始めた30年代半ばから石炭不況に見まわれて、昭和40(1965)年に日鉄御橋。42年には潜龍の県北地区で隆盛を誇った二つの炭鉱が相次いで閉山し炭鉱の火も消えた。

◆ － ◇ － ◆ － ◇ － ◆ － ◇

炭鉱野球チームで特筆するのは端島炭鉱。端島は別名軍艦島と呼ばれ長崎港から南西の海上約17.5kmにあり埋め立てにより南北480m、東西160mとなった小さな島である。昭和35年に最高の５千人余が住んでおり、2.5km北にある高島鉱業所と競り合って西彼杵地区代表で県選手権大会に第４回(昭和29年)大会初出場以来、第14回(S39年)大会まで６回出場したが、昭和49(1974)年１月に閉山し無人島となった。閉山から41年後の平成27(2015)年７月に『明治日本の産業革命遺産』として世界文化遺産に登録された。

また高島鉱業所も国内炭の需要減少から炭鉱閉山の流れは止まらず、昭和61年に閉山した。

準硬式球を使用した県下郡市対抗野球大会

準硬式球とは握った感覚は中空の軟式ボールと同じながら、中がゴムで詰まっており打球感が硬式ボールと同じで、開発した内外ゴムの商品名からトップボールとも呼ばれていた。

県下郡市対抗軟式野球大会が第３回となった昭和28年から準硬式球使用の大会となったが、準硬式球の衰退により40年の第15回大会で13年間の使用を終止符とした。

第12回(S37年)までは10地区参加で行なわれたが、13、14、15の３年間は県下５地区(長崎、佐世保、諫早・北高、大村・東彼、西彼)から選ばれた７チーム＋前年優勝(推薦)の８チーム参加で行なわれた。準硬式使用の13大会での優勝チームは(○数字は大会)、③佐世保共済病院、④⑤住友潜龍炭鉱、⑥長崎澱粉(大村)、⑦紋珠岳炭鉱(佐世保)、⑧西肥バス(佐世保)、⑨親和土建クラブ(佐世保)、⑩長崎機械工具、⑪⑫⑬⑭⑮日本冷熱工業(長崎)であった。

〝北高南低〟の県軟式野球界勢力分布

第２回全日本選手権大会優勝の山領組をはじめ、第４回天皇賜杯代表の下川商事に、昭和33年第13回大会までに６度の天皇賜杯大会の舞台を踏んだ炭鉱チームは何れも佐世保や北松の県北勢。

レベル的には天皇賜杯より格下になるが、昭和32年から始まった高松宮賜杯の全日本選抜軟式野球の第２回大会二部(Ｃ級)に九州１枠から出場し、初戦の幌別富士鉄社宅(北海道)を10-０大勝。大阪の熊野クラブには１-０辛勝。準決勝の富士工業宇都宮(栃木)に０－２惜敗でベスト４となった相浦食販も佐世保勢。

対して県南勢は、天皇賜杯全日本においては第３回の谷畑(１勝)、第５回の川南造船(２勝)、第６回の西重長崎造船所(０勝)。第10回の長崎刑務所(諫早０勝)は天皇賜杯大会に続いて長崎県勢として初めて国体に出場しているがいずれもこれといった成績を残していない。強いて挙げれば昭和31年の九州ＢＣ級大会のＢ級で長崎澱粉(大村)が優勝し、その余勢で同年の県下郡市対抗(準硬)も県南勢として初優勝したぐらいのもの。

また35年の高松宮賜杯二部で九州１枠の中に入り、全国大会に出場(初戦敗退)した長崎西高クラブが目に付く程度であった。

県下郡市対抗でも第９回までに県南勢の優勝は大村澱粉だけで、戦後から昭和34年までの県軟式野球界の勢力分布は〝北高南低〟型といえる。

県下郡市対抗準硬式の後年は長崎勢の独壇場

これが変動を見せてきたのが昭和35年あたりから。この年の天皇賜杯の県代表は日本冷熱工業(長崎)で30年の長崎刑務所以来の県南勢。茨城を破って１勝した。

そしてその年の県下郡市対抗で30年と翌年の連続準優勝に甘んじていた長崎機械工具が決勝で日鉄北松を退け10大会目にして初めて長崎市に優勝旗をもたらした。

第11回(36年)大会から、第15回(40年)大会(準硬式最後の大会)までは日本冷熱工業が５連覇を達成したが、これは長崎勢がグンと力をつけたからではなく、炭鉱チームの相次ぐ解散でドングリの背比べ的な状態になったのと長崎機械工具や日本冷熱工業が準硬式選手権になると、目の色を変えて戦ってきたためであった。

長崎市民早朝野球大会は昭和34年が第１回

昭和34(1959)年８月17日に長崎市営野球場(通称・大橋球場)において、54チーム参加で始まった長崎市民早朝野球大会は、第36回(平成６年=1994)に最多の243チームが参加した。折しもこの年は大橋球場が老朽化のため解体される最後の年でもあった。

開始当時の長崎市軟式野球連盟役員らの呼びかけで市民早朝野球協会を設立。「正しい軟式野球の普及」を目的に公認野球場で正式の審判員が３～４人ついて試合を運営している。しかも半年以上にわたって開催している組織は他には無く〝長崎方式〟として知れ渡り、開始５年目の昭和39年新潟国体で社会優良団体の文部大臣表彰を受けた。

協会設立当時からの役員で長崎新聞記者だった平井清光氏(前・長崎県軟式野球連盟理事長で、前・市民早朝野球協会理事長=故人)は、早朝から大橋球場に出かけやすいように…と、球場から徒歩７～８分の地に自宅を建てたほどの熱の入れようであった。2019年に大会創立60周年を迎える。現在は二代目の丸山隆幸理事長(現・県連盟副理事長)。

群雄割拠の10年間

天皇賜杯全日本の長崎県代表は炭鉱勢最後となった昭和33(1958)年の日鉄北松御橋以降、44年までの間に10チームが晴れ舞台を踏んだ(チームの後の数字は試合数)。

34年が西肥自動車①(佐世保)、35年は日本冷熱工業②、36年が九州電工佐世保②で、37年は西肥自動車①が３年ぶり二度目。38年は長崎澱粉①、39年は佐世保重工業②、40年は九州電工佐世保②が４年ぶり二度目。41年の東芝炉材川棚②と、42年の三菱電機②は初出場で嬉しい１勝を挙げた。

長崎国体前年の43年には後に県南部の雄となる三菱重工長崎造船所が初出場するも初戦で消えた。

国体においては、30年の第10回大会で長崎刑務所が初出場以来、３年後の住友潜龍炭鉱も初戦敗退。さらに４年後の37年の西肥自動車も、４年をおいた41年の藤岡石油店もことごとく初戦で消えて４連敗。

こうしたことから、昭和44年の第24回長崎国体を控えて選手強化の面で危惧する向きもあった。

14年ぶりに復活した軟式球の県選手権大会

第３回大会から第15回大会まで準硬式球を使用した県選手権大会は昭和41(1966)年から軟式に戻った。８地区（長崎、佐世保、諫早・北高、大村・東彼、島原・南高、西彼、平戸・北松、福江・南松)代表の頂点に立ったのは、長崎県庁。

翌42年は長崎県庁が推薦出場して決勝戦は三菱重工長崎との長崎決戦。０－０延長11回に１点挙げた三菱重工長崎が逃げ切り初優勝。長崎国体前年の43年の決勝戦は佐世保から２年ぶり４度目出場の親和銀行。重工の猛打が爆発して７－０の勝利は大会２連覇を達成した。